



発行2010年6月30日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

.....
ハンザキ研をめぐるスター⑩

マムシ

日本の代表的な毒蛇である。名前はよく知られているが本物を見たことがある人はそんなに多くないだろう。私の姫路の自宅の側には竹やぶがあった。多分そこを住処にしていたのだろう、我が家のメダカの額ほどの庭で何个体かのマムシを捕まえたり見たりした。家の横で車に轢き殺されたのも拾ったことがあったが、今では藪のあとはマンションが建てられて数本の竹が残っているのみだ。ここハンザキの調査地生野町市川水系でも冷や汗をかいたことが数回あった。マムシだけでなく、本州に生息している蛇8種が全て確認できている自然環境豊かな地域である。といってもなかなかヘビに出くわす機会は多くない。黒化個体はカラスヘビと地域では呼ばれているが、独立種ではなく各種のヘビの色素異常によって出現したものである。捕まえて調べてみなければ種名が分からない。



草むらに放されたマムシ

先日、2匹のマムシが届けられた。ちょうど来合わせていたアメリカ人一行4人は「マムシ注意！マムシ注意！」と一斉にコールしながら大喜びをしていた。セントルイス動物園の飼育係のマークさんは手馴れたものでフックを使って運動場の草むらに放して撮影会が始まった。4人の大男と言いたい所だが、大きいのはジョンソンだけで、あとの3人は私並で、1匹のマムシを囲んで大騒ぎしている様子は無邪気なものだった。観察会に参加する子供たちに見せるためにも良い標本がほしかったが、よく見ると体にダニが食いついていた。マムシにたかるとは上には上があるものであるが、このダニも標本にした。アルコール度 50 の御神酒に漬け込んだのでマムシ酒として残すことになった。



写真1 マムシのダニ



写真2 マムシの野外撮影大会



写真3 マムシ酒



写真4 ハンザキ健康診断風景



写真5 冷たい水中でハンザキ・フィーバー



写真6 日米ハンザキ会議



写真7 ハンザキ・ユカタで勢ぞろい



写真8 麻布大学から戻ったハンザキの死体



写真9 日本工科専門学校生の除草実習



写真10 血管の老化現象



写真11 モリアオガエルのいい加減な産卵 (円内)



写真12 コロコロ・ガエル?

アメリカからのお客さん

先月終わりに中国でシンポジウムが開催されて、その帰りに日本各地を視察したいと言うことで4人の米国人が6月8～10日に掛けて生野へやってきました。その中の一人は在日のティムさんである。ハンザキ研へは9日に来て見学と潜水観察をしたいということであった。ちょうど100個体余のハンザキの健康診断の日であったので、大量のハンザキを見ることができて大喜びをしていた。健康診断をしている職員は胸まである長靴を履いていたが、彼らは手伝うと言って、はだしでプールに入っていった。水温が15度と冷たいのもかまわずに取り上げに参加していた。

私の工夫した調査用具にも興味を示し、盛んに写真を撮り質問してくる。東京の共同通信の記者であるティムさんが通訳でついているので助かった。そしてご希望の潜水観察に出かけたが、ウエットスーツ持参には驚いた。さすがにウエートを持っていなかったので水深7mの滝壺の底までは潜れなかったが、「ハンザキ注意！」と叫びながら周辺の岩の下から2時間で9個体のハンザキを手づかみしてくれた。全てマイクロチップが挿入されていた再捕個体であったが、中には22年間追跡している個体が含まれていていい記録が取れた。私は潜らずに陸を歩いて個体のチェックをすればいいので大助かりだった。それにしても半ズボンのウエットスーツなので露出しているすねは擦り傷だらけで2時間、私が終わりにしようと言うまで潜っているという、なんともガッツのあるメンバーだった。

アメリカのオオサンショウウオはイースト・ヘルベンダーとオーザーク・ヘルベンダーの2亜種がいるものの、最大個体は74gと日本産の半分の大きさにしかない。日本の大きなハンザキに触れることができ喜んでもらえたようだ。米国ではヘルベンダーと呼ばれ、生息数の減少が心配されているそうである。一方で、中国では食用のために養殖がされているということである。

10日には兵庫県立人と自然の博物館において、“日米ハンザキ・ワークショップ”が開催された。急な計画であったのでどのくらいの人が集まるのかと心配したが、50～60名と盛会であった。アメリカからの3人、日本側から4名の発表があったが、驚かされたのはアメリカハンザキは35度Cまで耐えることができるというものだ。35度と言えは熱帯魚でも暑いといいだしそうな水温である。日本のハンザキでは、25度Cを超えると冷たい水が湧き出す所を探して移動する。私の調査地でも25度以上になると夜間調査でも姿を見せない。質問すると、後日論文を送ってきてくれたが、一時的な水温ならともかく、考えがたい生態である。

これに先立ってティムさんはヘルベンダーの模型をアメリカから取り寄せてプレゼントしてくれた。全長55gの素晴らしいリアルなできばえで、ワークショップの会場に展示しておいたら大人気であった。しかし、最近では50gを越すサイズの個体がほとんど見つからないということである。この模型は“エデュケーション・キット”と書かれた箱に入っていたが、日本のハンザキでも誰か作ってほしいものと思った。

新聞記者の目から見たハンザキ研

会員 谷下 秀洋 (産経新聞豊岡支局長)

栃本先生のオオサンショウウオ研究も36年と長いですが、僕も豊岡支局勤務が7月で丸5年になりました。また、取材を通じてオオサンショウウオにかかわるようになって5年になりました。赴任当時は、9月のコウノトリ放鳥に向けて、各社の取材合戦が激しかったこと、平成16年の台風23号関連がまだまだ大きなニュースになっていたことが思い出されます。その中で僕の関心と呼んだのが、台風で被災した豊岡市出石町の出石川で、256匹のオオサンショウウオを確認したと言う記事でした。

僕は約30年前にも豊岡勤務の経験がありましたが、そのときはオオサンショウウオを取材した経験が無く、確認の数はもちろん出石川で確認されたことが意外でした。それまではオオサンショウウオが国の特別天然記念物という大切な生物と知らず、正直、取材対象としての興味もわきませんでした。多くの人の先入観でもある「気持ちが悪い」と言う印象でした。しかし、持ち前のへそ曲がりの性格から「他社の記者がコウノトリなら、僕はオオサンショウウオを取材しよう」と言う気持ちになり、それからはオオサンショウウオの関連資料などを読むようになりました。そのとき、栃本先生にも何度か取材しましたが、愛想が無く「またオオサンショウウオを知らない(馬鹿な)記者が取材に来た」といった冷たい雰囲気でした。

当時は栃本先生よりも出石川の復旧工事の現場責任者だった県土木の岩崎さんをよく取材していました。そして工事前の調査に同行したことが、オオサンショウウオの印象が大きく変わるきっかけになりました。夜の7時頃に出石川に入り、下流から上流に向かって歩きながら懐中電灯でオオサンショウウオを見つけるといふ地道ですが大切な調査です。他社の姿が無く適当に取材して帰ろうと思ったとき、川の堰の下で初めて野生のオオサンショウウオを見つけました。そのオオサンショウウオは水族館で見るとような、動かない死んだような両生類ではなく、強い流れの中で一生懸命手足を動かして堰を這い登ろうとする生命感あふれる生物でした。途中、休憩で別の場所で保護されたオオサンショウウオが運び込まれ、初めてオオサンショウウオに触りました。ブヨブヨしていましたが「気持ち悪い」と言う気持ちは無く「よく生きていたな」と言う気持ちでした。

以来、オオサンショウウオは僕の大切な取材テーマになり、オオサンショウウオの記事の量(質ではなく)では地元新聞や他社よりも多いと言う自負があります。また、記事の量に比例して、栃本先生の愛想も良くなり、今では色々な取材ヒントもいただき、豊岡から朝来市生野町のハンザキ研究所に何度も訪問させてもらっています。これからも記者としてオオサンショウウオの記事を書き続けたいと思っています。

(先日、産経新聞を取っていると言うご夫婦が見学に来ました。新聞に度々ハンザキ研の記事が出るので、一度見学に行こうということで来られたそうです。本当に、この6月だけで5回の記事が出ているのです。これも自称“ハンザキ記者”谷下さんの取材努力の結果です。2時間近い距離をものともせずに来られます。これからもよろしくお願ひします。)

モリアオガエルの産卵シーズン到来

例年通りの5月20日に産卵が始まったが、夜間の急な冷え込みが続いたりして継続的な産卵が見られない。産卵観察会は前もって日時を決めて募集することになるので、動物の都合にはあわないことになってしまう。しかし、観察会の目的はモリアオガエルのことやその周辺に生きている動物たちとの係わり合いを理解してもらうことなので、産卵行動が直接観察できなくとも、参加の皆様には満足していただけるように努力している。

今年の講師は昨年同様に山東町の波多野さんをお願いした。ご専門は昆虫だそうであるが、虫はカエルの重要な餌生物であるから昆虫談義も含めてお話をしていただいた。貴重な昆虫類の標本も持参しての講義。そして生きているカエル類（モリアオガエル・ヒキガエル・ツチガエル・トノサマガエルなど）も準備して回覧し身近にじっくりと観察してもらった。また、波多野さんのカエル・グッズも披露していただいたが、背中を木の棒でこすると鳴き声のような音が発するという民具は、子供たちだけでなく大人にも喜んでもらえたようだ（写真12）。

ハンザキ研ニュースに何回も紹介した“モリアオガエルのいい加減な産卵”の話だが本当にいい加減なのかどうか、少々自信がなくなってきた。それは、雨が降って泡巣が溶けてオタマジャクシが落下するという解説に疑問を持っていたことからの発想であったからだ。私は、植物の生えていないコンクリートのプールで産卵するカエルが多いので、木の枝を切ってきて差し掛けておき、産卵したらその枝を花瓶に生けて室内で展示していたが、雨が掛からなくともオタマは巣から脱出して、下のたらいの水に落下していくのだ。だから、自然界での降雨時に・・・という解説が？であったのだ。しかし、今年もまた、全く下に水場の無いところでの産卵があった。そして、雨が降るとオタマが落下して雨水と共に溝へと流れて行ったのである。納得！ しかし、やはり下に水があったほうが安全なのではないかとも思う。でも、水場があるとイモリが待ち構えていてオタマは食われてしまうので、普段は水が無いと外敵がいなくて安全なのかもしれないなどと考えてしまう。

また、木の枝に産卵することで目立ち梅雨時期の風物詩にもなる泡巣だが、側に木が生えていても水際の草や石に産卵する例も多く、“横着なヤツだ”へびに食われてしまうぞと心配してしまう。そして、その反対に見上げるように遥かに高い枝に産み付けているのを見ると（写真11）、落下するオタマは風に吹かれてどこに落ちていくことになるのかとまたまた心配になってしまう。やっぱりいい加減な産卵生態なのではないかとも思うのですが、皆さんはいかがお考えになりますか？

アメリカからの客人たちは初めて見たと大喜びだったが、モリアオガエルのような産卵生態のカエルは日本だけなのだろうか？ モリアオそのものは本州・四国・九州が棲息域となっている。泡状の卵塊を産むシュレーゲルアオガエルも当地には多数生息しているが、モリアオより早い時期に水田の畦などの土の中に産み付けている。彼らは水際の草や石に生みつけられている卵塊を見てシュレーゲルと叫んでいたがモリアオなのだ。

ハンザキの無残な死体

写真8に2個体の何とも言い難い無残な姿を紹介している。一方は頭部を切り開かれ、もう1個体は下顎がなくなっている。四肢の指は全て表皮がはがされている。その他、体のあちこちが切り取られて体表のどこにツボカビ類が付きやすいのかを調べた結果だろう。これは、数年前に国内で初めて確認された“カエルツボカビ症”のツボカビ類がハンザキにも付いているということから、麻布大学で“ツボカビ・フリー”実験に使われた6個体の内の2個体である。

僅か2か月ほどの実験の間に2個体と同じ日に死亡したと言うことをだいぶ後で聞いたが、なかなか死体が戻ってこない。これらの個体は平成16年の豊岡市の出石川災害で一時飼育されていたハンザキである。収容していた時に死亡した個体は全て発見しだすすぐに当研究所に届けられていたのであるが、おかしなことだ。ようやく、2年越しで帰ってきた冷凍死体を解凍してみたら生きていたような綺麗な皮膚であった・・・

この実験は大学の研究者が直接兵庫県土木に申し入れて実施された。“ツボカビ・フリー”の手法はすでにカエル類で行われた手法で、広島市安佐動物公園のハンザキでも検証されていた。同じことをやっても無駄ではないかと言う私の意見は無視されての強行であった。大変に残念なことであるが、せめて「もっと安価な薬品で、もっと簡略な方法を」と言う私の意見で、従来の10日間処理が5日間でフリーにすることができたそうだ。実験結果の後にもツボカビの検出は無かったと言う。それなのに、この死体の損壊状況はどのような意図を持って行われたのであろうか？ 実験後にもツボカビが付いていなかったと言うのに皮膚などを切り取っているのは分からないことだ。その上に、死亡の翌日には豊岡で残りの4個体が放流されたことになっている。私に相談することになっていたはずだが・・・

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

どうも老化現象というものは着実にやってくるようだ。間もなく70歳ですと言っているが先日、歩いている時に右足を捻ったらピリッと変な痛みが走った。一瞬だったので気にしないで一日の活動を終えて靴下を脱いだら写真10のようになっていた。血管が5か所で切れて出血していたのだ。血管添いにミミズ腫れになっていた。更に数日後には、夜中に左目をこすったら痛みが走った。朝起きて洗顔する時に左目が真っ赤になっていた。医者嫌いの私もさすがにこれには心配になって眼科を訪れた。結果は結膜下出血だそうで、高血圧の人によくあることだそうである。90~160という上も下も高すぎると言う血圧を指摘された。内科医に相談しなさいと言うことであるが、山を下りることができず1か月が過ぎようとしている。足の方はすぐに血が散っていったが、目のほうは診断どおり1週間かかった。血圧の方もその内に相談に行く気になっているが、常に持ち歩いている心筋梗塞用のニトロダームの期限も来ていることでもあるが、なかなか下山できないでいる。

ハンザキ研日誌

2010年6月

- 1日 調査 GS-303 開始 (～6月13日)
- 3日 丹波市青垣中学校2年生3名のトライやるウィーク (青垣町いきものふれあいの里で実習中) 受け入れ。ミナミトミヨの標本でお世話になった開田先生のお孫さんが参加されていた
- 8日 アメリカの4人が生野へ、モリアオガエルの産卵観察で午前2時まで
- 9日 ・米人4人と一日
・オオサンショウウオの健康診断
- 10日 日米ハンザキ・ワークショップ in 兵庫県立人と自然の博物館
- 11日 麻布大学からハンザキの死体2点返還 (写真8)
- 12日 日本工科専門学校・都市工学科生6名実習、構内の外来植物ヒメジョオンを30分で1,000本抜き取る
- 13日 調査 GS-303 終了 (6月1日～)
- 14日 大阪府安威川ダム建設委員会
- 15日 ・調査 GS-304 開始 (～6月24日)
・コムサロン 21 有元さんと納屋工房の長谷川さん、打ち合わせに来所
・新名神道路建設委員会事務局7名来所
・前・兵庫県姫路農林水産事務所長大谷氏来所
- 16日 ・水資源機構・川上ダム建設所4名来所
・京都大学西川先生、カモガワ・ハンザキ6個体搬入 (66個体目)
- 17日 右足土踏まず部分の血管5本切れる、老化現象ですね (写真10)
- 18日 関西電力奥多々良木発電所より、来年度黒川ダム湖のハンザキ救出調査決定
- 19日 ・NPO 事務局会議7名
・モリアオガエル夜間産卵観察会5組12名波多野講師他スタッフ7名
- 21日 ヒキガエル未成体 (体長6㌘) にマイクロチップ挿入放流
- 23日 マムシ酒作成 (写真3)
- 24日 ・調査 GS-304 終了 (6月15日～)
・新名神道路建設環境委員会開催、高槻にて
- 26日 ・調査 GS-305 開始 (～7月29日)
・神戸市立須磨海浜水族園、10年ぶりに視察
・地域再生研究センター第5回通常総会、神戸市にて
- 27日 保護中のハンザキNo.96 滅失、死因不明
- 28日 県養父土木事務所・尾崎氏他、オオサンショウウオ保護センターのポンプピット等の視察に来所
- 30日 0歳ハンザキ幼生の頭部ミズカビで7個体死亡

(本誌は「三井物産環境基金」の助成を受けて作成しています。)